

ツバを飲ませる

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

正月のテレビで「ベートーベン」という映画を見た。以前にもテレビでやっていたことがあって、チャンネルを回したのだが、すぐに見るのを止めてしまった。

ドイツの作曲家ベートーベンの伝記映画かと思ったのだが、イヌが主人公の映画だと気がついて、チャンネルを切り替えたのである。

別にイヌが嫌いだというわけではないけれど、辛いものを食べたい時に、甘いものを出されたような気分だった。

これは、題名の重要さがよく分かるケースである。ベートーベンという楽聖の名前をイヌに付けるなんて、いかにもアメリカ映画らしいと思うのだが、この一つの言葉が、その後も長い間、この映画になんとか違和感を与えていたことは確かだ。

今度初めてこの映画を見て、動物を主人公にした喜劇の同じようなパターンはあるけれど、まあまあ面白くまとめられた映画だというのが率直な感想だ。動物が人間顔負けの行動を取ることで笑わせるというのが、この種の映画に共通に見られる特徴なのだ。

私が特に面白いと感じたのは、プールに落ちて溺れそうになったニュートン家の末娘を、このセントバーナード犬が助ける場面だ。この場面は、映画の中では誰にも見られていない。父親も、母親も、兄や姉もまったく知らない、ベートーベンと末娘だけの秘密のまま映画は終わる。

だから、イヌ嫌いの父親はベートーベンに感謝するどころか、このイヌをなんとか家から追い出そうとして色々な手を試みるのだ。

普通の映画だったら、観客は別にして、事の良し悪しを見定める第三者の目がどこかに設けられている。例えば、母親や子供たちの誰かが現場を目撃して、ベートーベンの勇気や利口さを誉めたたえとか。

ところが、この映画では、意識の主体はどうやらベートーベンにあるらしい。このイヌがみずから目撃者や証人になりさえすれば、あとは誰が知ろうが知るまいが関係ないのである。

一例をあげると、ニュートン夫妻の財産を狙っている悪徳業者がいて、しきりにインチキな書類にサインさせようとしているのだが、この悪巧みに感づいているのはベートーベンだけで、ニュートン夫妻は最後まで気がつかない。

ニュートン氏がサインしようとするのを、ベートーベンは様々な動きをして妨害する。悪徳業者の男女二人は、庭中を引きずり回され、結局その悪巧みは失敗に終わるのだが、ニュートン夫妻は、自分たちがベートーベンによって何から救われたのか最後まで知らずにいる。

知っているのはベートーベンと悪者の男女だけで、あとは観客が見ていたというだけで終わる。母親はなんとなくこの二人が気に入らないのだが、それはむしろ動物的な直感であって、まるでイヌのベートーベンと立場を入れ替えたような役割を演じている。

ここで、この映画最悪のシーンに出会うのである。このシーンさえ無かったら、まずまずこの映画に合格点を付けても良かったのだが、すべてをぶち壊してしまうような、なんともイヤな一場面を目にするのだ。

庭のテラスに座っている二人の存在にイライラして、どうしても我慢ならないニュートン夫人は、ジュースのお代わりを注いでやりながら、コップにペッとツバを吐き込むのだ。

このたった一つの行動がこの映画全体をダメにしていると言ったら、言い過ぎだろうか。私は、このシーンで猛烈なショックを受け、このあとこの映画を楽しむ気分が半減してしまった。

イヌのベートーベンもやらないような、むしろ人間だからこそやる相手を侮辱する行為を、美しい妻であり、優しい母親であるニュートン夫人がやって見せたのだ。

自分のツバをこっそり吐き込んでおいて、他人に飲ませるという野卑で陰険な行為が行われるのは、おそらく刑務所とかゴロツキ酒場といった特殊な場所だと思われる。

しかし、普通の場所でも、例えば料理人やウエイターの機嫌を損ねたり怒らせたりすると、仕返しにこういうことをやられるという話も聞いた。

韓国ドラマ「私の名前はキム・サムスン」でも、主人公の菓子職人サムスンが、「あいつらに出すケーキにツバを吐きかけてやる」と叫ぶ場面があった。

私は、『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて—』（ビワコ・エディション版134頁）という本の中で、イタリア・レストランの料理人が自分の陰毛をむしり取り、ピッツァの中に入れた話を書いた。

これは、ドイツに住んでいる私の義弟が実際に経験したことである。料理のことでちょっと文句を言ったことが原因であった。料理人がズボンと腹の間に手を入れて何をしているのかと思ったら、こういうことだった。

憎らしい相手に自分の毛髪を食べさせたり、自分のツバを飲ませたりしようとする衝動はいったいどこから来るのだろうか。自分自身にとっては別に不潔でもなんでもないものが、他人に向けられると途端に不潔なものになり、侮辱的なものになる。

その理由は何であろう。このことを追求すれば立派な「清潔の哲学」になることを、私は上記の本の中で書いた。今はそこまで進むつもりはないが、とにかくこういう行為は、人間性の根底にまで触れる奥の深い問題を含んでいる。

ニュートン夫人は、相手二人が企んでいる悪事を知っていたわけではなく、ただ気に入らない、神経に障るというだけで、あっさりこういうことをやってのけたのだ。

しかし、やられる身になり、自分のコップにいつの間にかツバを吐き込まれ、それを飲まされる

ことを想像したら、いったいどんな気持ちになるだろう。私は、映画のこのシーンに怖ろしさをさえ感じたのである。

この映画を見た子供たちが真似をしないとは限らない。動物の愛らしさを描きながら、一方で人間のいやらしさを教えてしまうというのは何とも皮肉な話だが、映画の制作者はいったい何を考えていたのだろう。

私は、このシーンひとつで、この映画に不合格点を付けてもよいと思った。題名ひとつの重要性和ともに、シーンひとつの重要性を教えてくれた映画だと言うことはできる。

[2008/01/26 magmag]